

高校生の大学選択行動に対する COVID-19 の影響 —進路決定要因を中心に—

○林如玉*, 倉元直樹**

東北大学教育学研究科*, 東北大学高度教養教育・学生支援機構**

1. 問題と目的

新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19）の感染拡大によって、学校における臨時休業や分散登校、学校行事や部活動の減少などの変化が生じている。同時に、教育現場におけるオンライン化も進んでいる。大学では、授業だけではなく高校生向けの入試広報活動もオンラインが基本となった。それらの変化は高校生の大学選択行動に大きな影響を及ぼすと考えられる。

本研究では、COVID-19 前と COVID-19 禍における高校生の大学選択における進路決定要因の比較分析を行い、進路決定要因を中心に COVID-19 の流行が高校生の大学進学における進路選択に与えた影響を明らかにすることを試みる。

2. 方法

2.1 調査方法

COVID-19 流行前の 2019 年 2～4 月に全国 11 校の高校生 7,700 名を対象に、ウェブにおける質問紙調査を行った。調査票の冒頭に調査内容及び倫理的配慮を説明する「研究同意書」を提示し、同意した者のみに回答を求めた。ウェブ調査の実施は各高校の担当教員に依頼し、QR コードが掲載された「研究協力のお願い」を調査対象者に配布した。調査サイトへのアクセスは任意とした。COVID-19 流行時の調査は 2021 年 2 月～3 月に全国 6 校の高校生 4,104 名を対象に、ウェブと紙面の両方による質問紙調査とを行った。ウェブ調査の実施方法は 2019 年調査と同じである。紙面調査は各高校の担当教員に依頼し、「研究協力の

お願い」と「調査票」を調査対象者に配布した。なお、双方の調査とも東北大学高度教養教育・生徒支援機構で論理審査委員会の承認を得た。

2.2 調査内容

調査票のうち本研究で分析に用いた変数は「年度」「学年」と「進路決定要因」である。これら 3 変数について、双方の調査内容は同一である。

最初に学年について選択式で回答を尋ねた。学年に関して、質問紙の冒頭に学年暦に合わせて「2018 年 4 月～2019 年 3 月（2018 年度）」「2020 年 4 月～2021 年 3 月（2020 年度）」という調査対象となる時期に関する全般的な指示を出した。その後、「進路決定要因」に関する質問を設定した。なお、調査対象とした年度に合わせ、前者を「2018 年度調査」、後者を「2020 年度調査」と呼ぶ。

「進路決定要因」について、著作権者の許可を得た上、倉元・小松・宮本（2017）の研究で用いられた質問紙を参考に、質問紙の開発を目的とした予備調査を行った。予備調査は、2018 年 8～9 月に、中国河南省鄭州市の二つの高校で、大学進学を目指している 173 名の高校生を対象として行われた（林・倉元，2019）。予備調査では、進路決定要因が「大学の魅力」「入学後の暮らし」「大学の費用」の 3 因子に分かれた。

本調査は 3 因子に基づいて項目を設定した。なお、「合格可能性」という要因については、予備調査の結果から見ると著しい天井効果が見られたため、場面想定法を使って統制し、調整変数とした。具体的には「合格可能性が 40% の A 大学」

に回答者が基本的に好ましいと思うような条件を設定した、それに対応して「合格可能性 90%の B 大学」には好ましいと思わないような条件を設定した。例を挙げると「就職条件が有利な A 大学」「就職条件が有利ではない B 大学」をペアとして、五つの選択肢から一つを選ぶ状況設定を作り、19 の場面を設定した。具体的な教示は図 1 の通りである。「20 の状況」とあるのは、回答態度に問題のある無効回答を識別するための項目を一つ設定したためである。

あなたが受験する大学に A 大学と B 大学があるとします。ただし、あなたはこのうちのどちらか一つの大学しか受験できないとします。もしも、あなたの A 大学への合格可能性が 40%で、B 大学への合格可能性が 90%だとすると、以下の 1 から 20 のそれぞれの状況において、あなたは A と B のどちらの大学を受験すると思いますか？

図 1 場面想定法の教示

3. 結果

本報告で分析に用いた項目は年度、学年と進路決定要因に関する項目である。データクリーニング後の 2018 年度調査の有効回答者数は 1,019、2020 年度調査の有効回答者数は 2,834 であった。年度、学年の度数を表 1 に示す。

表 1 「年度」と「学年」の度数表

		度数	%
年度	2018 年度	1,019	26.43
	2020 年度	2,834	73.57
学年	1 年生	1,428	37.06
	2 年生	1,451	37.66
	3 年生	972	25.23

注：無回答は除く

3.1 進路決定要因の因子分析

進路決定要因に関して、5 段階評定を等間隔の尺度として（「5」を 5 点、「4」を 4 点、「3」を 3 点、「2」を 2 点、「1」を 1 点）得点化した。得点が高いほど、大学への「合格可能性」が重視され、大学選択は「安全志向」の傾向にあると解釈される。逆に、得点が低いほど、大学への「合格可能性」より、「大学の特徴」が重視され、大学選択は「挑戦志向」にあると解釈される。

(1) 2018 年度調査

2018 年度調査の「進路決定の理由」について探索的因子分析（重みなし最小二乗法）を行った。スクリー図から 3 因子が妥当と判断した。プロマックス回転後の結果は表 2 の通りである。第 1 因子は、進学先として決定した大学の教育内容、就職状況といった大学中身を示唆する内容であることから「大学の内容」と命名した。第 2 因子は、生活や住まいといった暮らしを示唆する内容であるから「大学の環境」と命名した。第 3 因子は、奨学金、学費といった大学の費用に関わる内容であることから「大学の費用」と命名した。クロンバックの α 信頼性係数を求めたところ、「大学の内容」は .87、「大学の環境」は .81、「大学の費用」は .78 と十分に高い信頼性が得られた。

(2) 2020 年度調査

2020 年度の「進路決定の理由」についても同様に探索的因子分析（重みなし最小二乗法）を行った。プロマックス回転後の結果は表 3 の通りである。2018 年度のデータと同じ因子構造が得られた。クロンバックの α 信頼性係数を求めたところ、「大学の内容」は .85、「大学の環境」は .79、「大学の費用」は .80 と十分に高い信頼性が得られた。進路決定要因について、「大学の内容」「大学の環境」「大学の費用」の 3 因子が抽出された。2018 年度調査と 2020 年度調査では同一の結果が得られた。両方とも信頼性が高く、安定した構造と考えられる。

表 2 2018 年度 因子分析結果

	I	II	III	共通性
研究の水準	0.79	-0.06	0.00	0.56
学びたい学部専門	0.77	-0.28	0.19	0.48
指導して欲しい先生	0.76	0.00	-0.01	0.56
社会的評価	0.57	0.23	-0.17	0.46
施設設備	0.51	0.23	0.09	0.55
専門有名かどうか	0.46	0.36	-0.12	0.49
校風や雰囲気	0.46	0.13	0.11	0.38
大学院	0.43	0.29	-0.09	0.38
就職条件	0.43	0.17	0.03	0.33
売店や食堂	-0.08	0.78	0.08	0.60
部活動	-0.04	0.75	0.05	0.55
寮	-0.03	0.64	0.06	0.43
地域	0.08	0.52	-0.15	0.26
交通便利	0.13	0.52	0.17	0.51
通学	0.09	0.50	0.02	0.33
生活費	-0.04	0.06	0.81	0.69
授業料	0.08	-0.12	0.77	0.55
奨学金制度	-0.02	0.28	0.51	0.48
因子間相関 I	-	0.68	0.45	
因子間相関 II	-	-	0.55	

表 3 2020 年度 因子分析結果

	I	II	III	共通性
研究の水準	0.81	-0.09	0.01	0.57
指導して欲しい先生	0.72	-0.07	0.10	0.50
学びたい学部専門	0.69	-0.22	0.13	0.37
施設設備	0.53	0.25	0.06	0.56
大学院	0.47	0.20	-0.07	0.35
社会的評価	0.41	0.35	-0.19	0.40
専門有名かどうか	0.39	0.37	-0.10	0.43
校風や雰囲気	0.38	0.28	0.05	0.39
就職条件	0.36	0.27	-0.02	0.33
交通便利	-0.10	0.72	0.13	0.53
売店や食堂	-0.06	0.69	0.15	0.56
寮	-0.05	0.58	0.18	0.43
地域	0.10	0.58	-0.21	0.32
通学	-0.04	0.52	0.08	0.29
部活動	0.11	0.50	0.11	0.41
生活費	0.02	0.02	0.83	0.72
授業料	0.04	-0.06	0.75	0.54
奨学金制度	0.03	0.16	0.59	0.49
因子間相関 I	-	0.68	0.36	
因子間相関 II	-	-	0.53	

3.3 進路決定要因に対する COVID-19 の影響

各因子に高い負荷量を示した項目得点の平均値を算出し、それぞれの下位尺度得点とした。得点が高いほど、大学選択は「安全志向」の傾向にあると解釈される。逆に、得点が低いほど、大学選択は「挑戦志向」にあると解釈される。

進路決定要因「大学の内容」「大学の環境」「大学の費用」の下位尺度得点に関して、「年度」「学年」によって異なるか否かについて検討した。各因子について、それぞれ「年度」「学年」を要因とする 2 要因分散分析を行った。以下、各因子の分析結果を説明する。

(1) 「大学の内容」

「大学の内容」の 2 要因分散分析を行った結果、「年度」(F [1,3804]= 11.003, p<.001)「学年」(F [1,3804]= 24.658, p<.001)の主効果が有意であった。また、「年度」と「学年」の 1 次交互作用も有意 (F [1, 3804] = 4.614, p<.05) であった。単純主効果の検定を行った(表 4)。「大学の内容」について、年度の単純主効果が 2 年生で有意であった。平均値を比較したところ、2018 年度調査の生徒が 2020 年度調査より合格率を重視した進路選択を行う傾向が見られた。学年の単純主効果は双方で有意であった。多重比較を行った結果、学年が上がるにつれて、生徒の大学選択活動が「安全志向」となる傾向が見られた。

表 4 単純主効果検定

変動因	SS	df	MS	F
年度 at 1 年生	0.00	1	0.00	0
年度 at 2 年生	11.12	1	11.12	18.3***
年度 at 3 年生	1.17	1	1.17	1.931
学年 at 2018	15.04	2	7.52	12.368***
学年 at 2020	20.56	2	10.28	16.904***
誤差	2313.491	3804	0.60	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

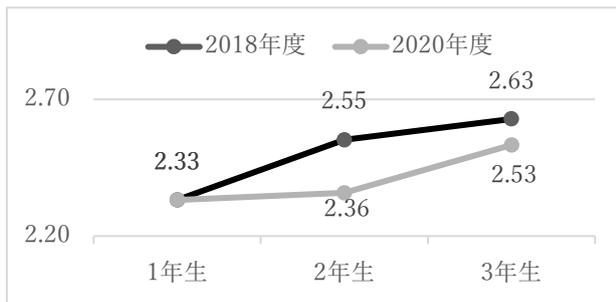


図 2 「大学の内容」の推定周辺平均

(2) 「大学の環境」

「大学の環境」について、1 次交互作用は見られなかった。「学年」($F[2,3795]=42.435, p<.001$)の主効果だけが有意であった。テューキー法を用いて多重比較を行った結果、学年が上がるにつれて、得点の平均値は有意に高くなった。「大学の環境」に関して、学年が上がるにつれて合格率重視した進路選択を行う傾向が見られた。

(3) 「大学の費用」

「大学の費用」の分散分析を行った結果、1 次交互作用は見られなかった。「年度」($F[1,3819]=9.428, p<.01$)「学年」($F[1,3819]=21.983, p<.001$)の主効果が有意であった。年度の主効果について、平均値を比較したところ、2020 年度調査 ($M=2.53$) が 2018 年度調査 ($M=2.40$) より有意に高かった。コロナ禍の下ではコロナ以前よりも合格率重視な進路選択を行う傾向が見られた。学年の主効果について、多重比較を行った結果、「大学の費用」について、学年が上がるにつれて、生徒の大学選択活動が「安全志向」にある傾向が見られた。

4. 考察

日本の高校生の進路決定要因として「大学の自身」「大学の環境」「大学の費用」の 3 因子が抽出され、高い信頼性を持つことも確認できた。「進路決定要因」の 3 因子構造は COVID-19 前後で同一であり、安定した構造と言える。

「進路決定要因」の 3 因子の学年差を確認したところ、同じ特徴が見られた。COVID-19 と関係なく、学年が上がるにつれて、高校生の大学選択行動が合格率重視の「安全志向」になっていく。実際に受験する大学を決めなければならない入試の本番が近づくとつれて現実的な態度に変化していくことは合理的だと考えられる。

「大学の内容」「大学の費用」の 2 因子では COVID-19 が高校生の大学選択に与える影響が見られた。「大学の内容」について、COVID-19 の影響で 2 年生の大学選択が「安全志向」から「挑戦志向」にシフトしていた。前述の「合理的な行動パターン」と逆の傾向である。林・倉元(2022)によれば、COVID-19 の流行が高校生の大学選択のための情報収集活動を抑制したことが分かっている。行動面で見られた、COVID-19 禍による高校生の大学選択のための準備行動の遅れが、心理的な側面でも裏付けられたと言える。

「大学の費用」については、学年と関係なく、COVID-19 の下では、より合格率を重視する進路選択を行う傾向が見られた。浪人して家庭にさらに経済的負担を強いるリスクを回避する意識が働いたのではないかと推測できる。

コロナ禍は学習活動のみならず、高校生の進路選択行動を抑制させ、より合格率重視の大学選択を促す方向で影響を及ぼしたと推測される。

「謝辞」

本研究は JSPS 科研費 JP21H04409 の助成に基づく研究成果の一部である。